
スペインの時

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スペインの時

【Nコード】

N7286L

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

十八世紀スペインの古都トレド。時計屋の美しい人妻コンセプトオンに言い寄る男達。彼女はそれにどう対するか。ラヴェルのオペラを小説にしました。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一章

スペインの時

古都トレド。何処かのどかなこの街の時の流れは実にゆったりとしたものである。街の人々も呑気な感じで非常に穏やかに行き来している。

その中で街の大時計が十二時を示した。鐘が鳴りこのオレンジと青の街に昼が来たことを教えた。

「あれっ、もう昼なのか？」

「そうみたいね」

太って恰幅のいい男に対して彼とは正反対に小柄であだっばい顔の女が応えた。男は黒いズボンにチョッキを着ていてシャツは黄色がかつた白である。女は青いスペインのスカートに黒い背中がよく見える上着である。男の髪は黒で人懐っこい顔をしている。女は黒髪を上で団子の様にしてまとめている。そのあだっばい顔はやや浅黒く黒い目の光が実に奇麗である。

観れば二人は時計屋の中でのんびりとしている。男は何か時計をいじっていて女は周りを少しだけ掃除している。一応働いてはいるがやはりのどかなものである。店の中は壁の至る場所に時計がかけられている。カウンターのところにも小さな時計が幾つもある。すぐに時計屋とわかるものであった。

「早いもんね。もうお昼なんて」

「そうだよな。飯を食ってちょっとしたら」

「シエスタね」

「食ってすぐにでもいいな」

男はこんなことも言うのであった。

「もうすぐにでも」

「好きにしたらいいわ」

女は男の今の言葉にこう返した。

「あんたの好きなようにね」

「そうするか」

「そうしたらいいわ。いえ、ちょっと待って」

「どうしたんだい？コンセプトオン」

男はここで女の名を呼んだのだった。

「何かあったのかい？」

「今日はあれじゃない」

コンセプトオンと呼ばれた女はここで彼に対して告げた。

「市役所の時計の時間合わせに行く日だったわ」

「ああ、今日だったか」

男はコンセプトオンの言葉を聞いて思い出したように声を出した。

「もうその日か」

「そうよ。だから行かないと」

「じゃあお昼を食べてからね」

「御飯はもう用意してあるから」

コンセプトオンはこう彼に告げた。

「一緒に食べましょう」

「そうだな。じゃあ食べてからな」

「行くといいわ」

こう話してから店でもあるこの家の中に消える二人であった。

二人が家の中に消えると暫くして痩せて明るく屈託のない顔の若い男が店にやって来た。郵便屋の服を着ていてロバを連れてくる。やはり黒い目であるが鷺色の目が少し違う印象を与えていた。

「おおい、トルケマダさん」

彼は店の前まで来るとこう言って人を呼んだ。

「いるかい？いたら返事をしてくれよ」

「ああ、ラミーロさん」

コンセプトオンが店から出て彼に伝える。

「何の様なの？」

「時計の修理を頼みたくてね」

ラミーロと呼ばれた彼はこうコンセプションに告げた。

「それトルケマダさんに頼みたくて」

「旦那なら今出て来るわ」

コンセプションはこう彼に離れた。

「今御飯を食へ終わつたから」

「そうなんだ。じゃあすぐに」

「けれど今日は無理よ」

ところがコンセプションは今度はこんなことをラミーロに言うのであった。

「今日はね」

「それはまたどうしてなんだい？」

「今日亭主は市役所に行かないといけないから」

だからだというのである。

「それにね」

「それに？」

「今私の部屋に時計を入れてもらっているのよ」

こう彼に話すのだった。

「だから今日は暇がないわ。悪いけれどね」

「じゃあ帰れつていいのかい？」

「悪いけれどそうよ」

結局言いたいことはそういうことであった。

「だからまた明日来てね」

「やれやれ。困つたなあ」

ラミーロはそれを聞いて諦めて帰ろうとする。コンセプションはそんな彼を見て何故か口元を笑わせていた。その彼女の後ろにあの男トルケマダがやって来た。

第二章

「あ、駄目だったよ」

「駄目だったって?」

「とても重くてね」

両肩を竦めさせてコンセプシオンに話すのだった。

「二階まで持って行けないよ」

「えっ、そんなに重い時計なの」

「重いなんてものじゃないよ」

たまりかねたような声で言うトルケマダだった。

「だからね。それよりも」

「そう。市役所にね」

「行って来るよ。あっ、ラミール君」

ここでラミールにも気付いたのだった。

「どうしたんだい、今日は」

「家の時計の修理を頼みたくて」

「ああ、じゃあすぐに戻るよ」

ラミールその言葉を聞いてすぐに述べたトルケマダだった。

「それまで待っていてくれよ」

「ええ、わかりました」

「それじゃあ」

トルケマダはそのまま店を後にして歩いて市役所に向かった。コンセプシオンとラミールは二人になったがここでコンセプシオンはラミールに対して言うのであった。

「御願いがああるけれど」

「御願いですか」

「ええ。うちの亭主が運べなかった時計だけれど」

このことを言うのであった。

「時計ね。私の部屋に運んでくれないかしら」

「奥さんの部屋にですか」

「いいかしら」

ラミーロの顔を見上げて問う。

「それで」

「ああ、別にいいですよ」

ラミーロは二つ返事でそれに応えた。

「僕も待たせてもらっている間暇ですしね」

「お昼はもう食べたのね」

「食べましたよ」

もうそれは食べたというのである。

「とつくに」

「そう。それじゃあいいわね」

彼がお昼と食べたと聞いてそれでいいとしたコンセプシオンであった。

「御願するわね」

「それで部屋は」

「二階よ」

こうラミーロに告げた。

「二階の左側の一番奥よ。私の部屋は」

「わかりました。じゃあそこに」

「御願いね。じゃあ行つて頂戴」

「はい」

「時計は大きくて数字がギリシア数字と中国の文字両方で書かれていて白いのだからすぐにわかるわ」

「また随分と変わった時計ですね」

「わかり易いようにそれにしたので、私のってね」

こんな話をしてからラミーロは店に入った。だがコンセプシオンは店の外に出たままである。そうして店の外、街を見回すのだった。

「まだ来ないわね」

少し苛立ったような顔で呟くのだった。

「いつもはもう来ているのに」

どうやら恋人を待っているらしい。結婚しているがコンセプトンはどうもそうしたこともお盛んなようである。

「遅いわね」

こう呟いて不満を感じているとだった。茶色い髪に黒い目の白い肌の青年が来た。マントを羽織り羽根帽子で頭を飾り上着もズボンも洒落たものだ。顔立ちは整っているが妙に胡散臭い雰囲気もそこに醸し出している若い男がやって来たのであった。

「ゴンサルベさん」

「どうも、コンセプトンさん」

ゴンサルベと呼ばれた若い彼は気取った動作で恭しく彼女に一礼してきた。

「今日もお美しい」

「有り難う」

このお世辞には礼の言葉で返す。しかしその表情は少し苛立ったもののみであった。

「それで学校は？」

「もう講義は終わりました」

ゴンサルベは軽やかな声で答える。

「それで今は詩を考えているのです」

「詩をなのね」

「はい。それでコンセプトンさん」

その軽やかな声でまた話すのだった。

第三章

「この詩を聞いて下さい」

「詩を？」

「貴女のその美しさを詠ったものです」

頼まれてもいないのにこう言っているのである。

「この詩こそが」

「ええ」

その詩が始まるうとするところで嫌そうな顔になるコンセプションだった。その苛立ちがさらに高まっているようである。その苛立ちの中で咳きもした。

(全く。もうすぐ来るかも知れないのに)

「ああ、麗しのコンセプション」

その中でゴンザルベの詩が始まった。

「貴女のそのお姿を見ていると」

「コンセプションさん」

だがここでラミーロが店の中から出て来た。そうしてそのうえで彼女に声をかけてきた。

「時計かけておきましたよ」

「あら、有り難う」

コンセプションはそれを受けてゴンザルベから顔を放して応えた。

「おかげで助かったわ」

「ええ。それじゃあ後はゆっくりと」

「いえ、ちよつと待って」

休もうとするラミーロにさらに言っただった。

「まだやって欲しいことがあるのだけれど」

「あれっ、まだあるんですか」

「そうなの。別の時計をここに持って来て」

「別の時計をですか」

「大きければ何でもいいわ」
条件はこれだけであつた。

「人が入るだけの大きさがあればね」

「人が入るだけですか」

「そうよ。私も行くわ」

自分もというのだった。

「それでどの時計がいいのかね」

「選びますか」

「そうしましょう」

こうして二人はゴンザルベをよそに一旦店の中に入った。そうして二人でかなり大きな壁掛け時計を持って来てそのうえでゴンザルベに対して言うコンセプトオンだった。

「ゴンザルベさん」

「あつ、はい」

今まで一人恍惚として詩をろうじていたゴンザルベはコンセプトオンに応えた。

「何でしょうか」

「悪いけれどこの時計の中に入っていてくれないかしら」

「時計の中にですか」

「ええ。後で二人で会いたいから」

くすりとした笑みを浮かべて彼に告げるのであつた。

「だから御願いな」

「二人で御会いできる」

それを聞いて下心を覚えるゴンザルベだった。この辺りは実に素直である。

「それでは」

「それまでは時計の中で待つて欲しいのよ」

声には誘うものさえ入れてきていた。

「だからね。時計の中に」

「畏まりました」

「ゴンサルベはまた畏まって一礼してみせて応えるのであった。

「それではいざその中に」

「はい、どうぞ」

「コンセプシオンが開けたその時計の中に入るゴンサルベであった。だがその彼が時計の中に入ると口髭を生やして立派な服を着たやけに太った男が出て来たのであった。

「いやあ、コンセプシオンさん」

「あっ、これは」

「ドン＝イニーゴさん」

「コンセプシオンとラミーロはその太った男に対して挨拶をした。

「どうしてここに？」

「何かあったんですか？」

「あっ、ラミーロさん」

「ここでまたラミーロに対して言うコンセプシオンであった。

「ちょっとお店の中に戻って時計を探してきて」

「時計ですか」

「そう。懐中時計をね」

「それを探してきて欲しいというのである。

第四章

「それも一番いいのを」

「わかりました。それじゃあ」

ラミーロは素直に応えてまた店の中に入った。今度はコンセプシオンとこのイニーゴが二人になるのであった。

「少し待っていて下さいね」

「ええ」

イニーゴはにこやかにコンセプシオンの言葉に応えた。

「それでは暫く」

「はい」

「ところでです」

ここでイニーゴはその笑みを思わせぶりなものにさせてまたコンセプシオンに言ってきた。

「今日御主人は市役所に行っておられますね」

「はい、そうですね」

コンセプシオンはこの時は普通に彼に応えた。

「それが何か」

「御主人は時計の時間合わせに行っておられますが」

イニーゴの思わせぶりな顔と声は続く。

「これは私が市役所に頼んだのです」

「そうだったのですか」

「そうすれば御主人は店を離れる」

彼の笑みがさらに思わせぶりなものになってきた。

「そして奥様御一人となるので」

「それが何か」

「御会いできるので。ゆっくりと二人で」

目が次第に色目になってきた。少しずつコンセプシオンに近付いていく。その中でまたラミーロが戻って来たのであった。

「あの、奥さん」

「ええ。何かしら」

今はイニーゴの言い寄りにあえて無反応を装っていたコンセプシオンはここではラミーロに顔を向けることでその言い寄りをかわしたのだった。

「時計は見つかったのね」

「はい、見つかりました」

立派な懐中時計をコンセプシオンに見せて告げる。

「これはどうでしょうか」

「いいわね」

コンセプシオンはその見事な懐中時計を見て微笑んだ。

「これならいいわ」

「そうですか、それじゃあ」

「ただね」

しかしここでコンセプシオンはまた言うのであった。

「また一つ御願いたいことがあるのだけれど」

「何ですか？」

ラミーロは素直な調子で彼女のその言葉に応えた。

「あのね、この時計だけれど」

「ええ、これですね」

「そう、この大きな時計」

ゴンサルベが入っているその時計を指し示しての話であった。

「これをお店の中に持って行って欲しいのよ」

「わかりました。それじゃあ」

「御願いますわね」

「すぐにでも」

「あつ、待って」

ところがここでまた言うコンセプシオンであった。

「私も行くわ」

「奥さんもですか」

「その時計はかなり重いから」

だからだというのである。なおこの時計にゴンサルベが入っていることはラミール口にもまだここにいるイニゴにも全く言っていない。

「だからね。一緒に行くわ」

「わかりました。それじゃあ」

「私の部屋に持って行こうかしら」

コンセプトオンはこんなことも言った。

「ひよっとしたら合うかも知れないし」

「ええ、それじゃあ」

こうして二人はゴンサルベが入ったその時計を店の中に二人で持って行くのであった。イニゴはその場に一人になってしまった。

「あれっ、私だけか」

ここでやっと自分だけが残っていることに気付いた。

「おやおや、どうしようかな」

呑気な調子でこれからのことを考える。考えているとふと店の看板がわりに壁にかけてある大時計がその目に入ったのであった。イニゴはそれを見て悪戯心を覚えた。

「そうだ、この時計の中に入って奥さんを驚かしてやるっ」

こんなことを考えてその時計の中に入り込みにかかった。太っているので入るのに苦労したがそれでもだった。何とか入り込むことができ、時計の中に隠れてしまった。

第五章

すぐにラミールが店の外に戻って来た。そうして言うのであった。「さて、奥さんに言われた店番をしようか」

こう言って立っていたが暫くして何故か髪が乱れ首筋や額から汗を流し息も荒くなったコンセプションが出て来た。何処か慌てて上着の端もなおしたりしている。

「あれ、奥さん」

「あの時計だけれど」

荒くなった息を何とか整えながらラミールに言うのであった。

「やっぱり私の部屋には合わないわ」

「合わないですか」

「ええ。だからね」

そして言うのであった。

「元の時計にしてきて欲しいの。いいかしら」

「わかりました。それじゃあ」

「御願いますわね」

こうしてまた店の中に入るラミールだった。コンセプションは時計の中に隠れているイニールゴには気付かず一人こつ咳くのであった。

「やっぱり学生さんは激しいわ」

「どうやらゴンサルベのことらしい。」

「全く。あんなに凄いなんて」

何があつたのかは知らないが何処か満足した顔である。そしてまた言うのであった。

「あの人だっしょっちゅう女の子と会ってるし」

夫のトルケマダのことである。

「市役所の若い娘とできてるの知らないと思ってるのかしら」

夫の浮気のことを気付いているのであった。

「お互い様よ。これはね」

「こう言って自分を免罪する。そうして無意識のうちに時計の傍まで来るとだった。」

「奥さん」

不意にイニーゴの声が聞こえてきたのであった。

「奥さん、宜しいですか」

「イニーゴさんですか？」

「はい」

イニーゴはにこやかな声で彼女に答える。

「私ですよ」

「お姿が見えませんが」

「姿を消しているのです」

今度は悪戯っぽく言ってみせた。

「それですね」

「ええ」

「若者というのはあれですよ」

こんなことを言い出してきたのであった。

「まだまだ経験不足。ですから」

「ですから？」

「相手は中年の男が一番です」

要するに自分のことである。

「相手は。如何でしょう」

「どうかしら」

しかしまだゴンサルベのことを覚えている「コンセプションはあまり乗り気ではないのであった。」

「それは」

「まあ御考えになって下さい」

イニーゴは焦ってはいなかった。

「よくね」

「ええ。そうさせてもらおうわ」

「また御伺いしますのです」

やはり焦らないイニーゴであった。

「そういうことで」

「ええ。そういうことで」

二人の話が終わるとまたラミーロが戻って来た。何時の間にか店の前にゴンサルベもふらふらと出て来ている。ラミーロは彼の姿を認めて言うのであった。

「どうしてゴンサルベ君がここに？」

「いえ、ちょっと」

満足しきった顔でラミーロに答えてみせた。

「いいことがあります」

「いいこと。何だい？」

「何でもありませんよ」

流石にこの問いには答えなかった。

「何でもね」

「そうなのか。まあとにかくだね」

「ええ」

「君は帰った方がいいんじゃないかな」

「こうゴンサルベに告げるのであった。

「時計を買わないんだらう？ だったらね」

「いや、もう少しここにいたいな」

だがゴンサルベは余韻を楽しむような顔でコンセプションを見ながら言うだけであった。

第六章

「もう少しね」

「別にいいじゃない」

コンセプションもそんなゴンサルベの顔を見てくすりと笑いながらラミーロに言うのであった。

「今日はのどかだし別に」

「奥さんがそう言うんならいいですけど」

彼女が言うならばラミーロに反論はなかった。

「それじゃあ」

「ええ。そういうことだね」

「仕方ないな」

ラミーロは今度はゴンサルベを見て言った。

「じゃあそういうことだね」

「ええ。御願いな」

また彼に告げるコンセプションであった。その後でラミーロは彼女のまだ汗に濡れている顔や紅い唇、そしてその首筋や肩、それに黒く上にした髪を見て思うのであった。

「いいよな」

彼女の色香を見ての言葉であった。

「あの人と時計屋やれる旦那さんが羨ましいよ、全く」

「それでラミーロさん」

「はい」

またラミーロに言ってきたコンセプションであった。

「お客さんが来たから」

「あつ、そうなんですか」

言われてはつとするラミーロであった。見れば確かに年老いた男が来ていた。

「時計を一つ御願いな」

「ええ。それじゃあ」

こうしてラミーロはまた店の中に入るのであった。そうして時計を取りに行く。ゴンサルベは恍惚として何か詩を言葉にしていた。コンセプトシオンはここでイニーゴが時計の中に隠れているのに気付いたのだった。

そうして彼に問うのであった。

「どうしてこんなところに？」

「奥さんを驚かせようと思ってだからだというのである。」

「それで中に入ったんですか？」

「出られそうですか？」
「無理です」

入ることには入ったが、であった。

「とても。これは」

「そう。困ったわね」

それを聞いて腕を組んで考える顔になるコンセプトシオンであった。

「それじゃあどうしようかしら」

「はあ」

「ラミーロさんなら何とかしてくれるかしら」

ラミーロの名前を自分で出したところでこうも思うのだった。

「そうね。顔もいいしスタイルもいいし頼りになるし」

「こう思いだすとすぐにさらに考えを進めさせるのであった。」

「何か来ないし。かわりに」

待っている恋人が来ないのでラミーロを、というわけだった。ここでそのラミーロが時計を持って帰って来て老人に時計を渡してお金もちゃんと受け取る。そのしつかりとした様子を見てにこりと笑ってそつと彼に歩み寄るコンセプトシオンであった。

「ねえラミーロさん」

声が幾分か甘いものになっている。

「一ついいかしら」

「何でしょうか」

「仕事は一段落ついたし」

「はい」

「またお店の中に来て欲しいの」

「こつ彼を誘うのであった。」

「お店の中にね。いいかしら」

「お店の中にですか」

「そう。二人でね」

「目は艶を含んだものになっていた。」

「いいかしら。それで」

「まさかと思えますけれど」

「そう、そのまさかよ」

「このことをラミー口にも隠しはしないのだった。」

「だからね。今から二人でね」

「わかりました。それじゃあ」

こうして二人で手を組み合って店の中に消える二人であった。ゴンサルベはまた詩を言葉に出しているしイニーゴは出られない。暫くすると二人はそれぞれ言った。

「参ったなあ、これは」

「帰ろうかな」

実にそれぞれであった。イニーゴは困っていてゴンサルベは帰ろうとする。ところがここでトルケマダが店に戻って来たのであった。

「あつ、これは」

「トルケマダさん」

二人はそれぞれトルケマダの姿を認めて言った。

第七章

「おかえりなさい」

「これはどうも」

「やあ、ゴンサルベ君」

トルケマダはまずはにこりと笑ってゴンサルベに挨拶をした。そしてそれから時計の中にいるイーゴに気付いて声をかけるのであった。

「どうして貴方はその中に？」

「まあ色々」と

言葉を濁すがここでトルケマダは勘違いして言うのであった。

「ははあ、あれですな」

「あれとは？」

「その時計が欲しいのですな」

こう彼に言うのであった。納得したような顔で。

「その時計が。そうですな」

「え、ええまあ」

その場を取り繕う為に彼の勘違いに乗るイーゴだった。まさか彼の妻を驚かす為だったとも言い寄っていたとも言える筈がなかった。

「そうなんですよ」

「わかりました。それではです」

トルケマダはいよいよ上機嫌になってまた彼に言うのであった。

「その時計はお売りしましょう」

「この時計をですか」

「左様、お店の看板みたいなものですが御気に召されたならです。売るといのである。商売人としては中々きつぷのいい彼である。

「どうぞです」

「はあ。まあそう仰るのなら」

まさかと思つたが頷くしかなかった。イニーゴはこうしてこの時計を置くことになった。トルケマダは次に懐から新しい懐中時計を出してゴンサルベに声をかけてきていた。

「この時計だがね」

「あつ、いい時計ですね」

「どうかな。勉強しておくよ」

にこやかに笑つて彼に言うのであつた。

「だから。どうだい？」

「ええ。それじゃあ」

こうしてトルケマダはゴンサルベにも時計を売りつけた。続いて彼はまたイニーゴが隠れている時計のところに来て言うのであつた。

「とりあえず貴方にはそこから出てもらわないといけませんな」

「出られないんですよ」

イニーゴの言葉には泣きが入っていた。

「どうしたものでしょうか」

「そうですね。引つ張り出しますか」

トルケマダはこう考えて言うのであつた。

「ここは」

「あつ、それでしたら」

ゴンサルベも時計の傍にやって来てトルケマダに対して言ってきた。

「僕も手伝いますよ」

「あつ、悪いね」

トルケマダは快く彼のその申し出を受けるのであつた。

「それじゃあ頼むよ」

「ええ。じゃあ」

「よし、二人で」

「せーの」

イニーゴの身体を掴んで引つ張り出そうとする。だがどうしても出ない。何度も何度も引つ張るがやはり出て来ない。これに二人は

困ってしまった。

「参ったな」

「出てくれませんか」

「何処かに引つ掛かっているのかな」

「こう考えるトルケマダだった。」

「ひよつとして」

「イニーゴさんちょっと太り過ぎなんじゃないですか？」

「ゴンサルベは首を傾げさせて時計の中のイニーゴに対して述べた。

「やっぱり」

「ダイエツトが必要な」

「そう思いますよ。出られないじゃないですか」

「ううむ、弱った」

「とはいっても何処か呑気な様子のイニーゴであった。」

「どうしたものか」

「まあまた引つ張ってみましょう」

トルケマダは言った。

「何度でもね」

「そうしますか」

二人で言い合いそのうえでまた引つ張り出そうとする。だがここで店からコンセプションとラミーロが出てきたのであった。

やはりコンセプションは顔や首筋に汗をかいており息がまだ荒い。そしてそれでいて満ち足りた顔をしている。ラミーロも同じで二人はにこにこ顔を見合わせていた。

第八章

「じゃあまたね」

「はい、また」

二人にしかわからない話をする。だがここでコンセプションはイ
「ゴが隠れているその時計のところに夫の姿を認めたのだった。

「あら、帰ってたの」

「どうしますか？」

「まだ私達には気付いていないし」

彼女にとっては好都合であった。

「だからここは」

「素知らぬふりですか」

「貴方はただここを通り掛かっただけよ」

そういうことにしてしまふコンセプションであった。

「それで私は店番をしていて」

「はい」

「そういうことにしましょう」

配役をすぐに決めてしまったのであった。

「そういうことでね」

「わかりました。それじゃあ」

「後は」

さらに考えたうえで言うコンセプションであった。

「偶然を装って旦那の手伝いに行って頂戴」

「ええ。わかりました」

ラミー口は彼女の言葉に素直に頷くのであった。

「それじゃあ」

「さて、これでいいわ」

コンセプションは息を整え汗を拭きながら言った。

「後はいいようになるわ」

彼女の言った通りであった。ラミーロはすぐにトルケマダとゴンサルベのところへやって来て。本当に何気ない調子で「」と言つのであつた。

「どうしたんですか？」

「ああ、ラミーロ君」

トルケマダもここで彼に気付いたのであつた。

「まだ待っていてくれたのか」

「ええ、そうなんですよ」

「こうトルケマダに答えるのであつた。」

「それでどうしたんですか？」

「いや、イニーゴさんがね」

彼はその時計の中に隠れているイニーゴを指し示して言つのであつた。

「時計の中から出られないんだよ」

「そうなんですよ」

「ここでゴンサルベもラミーロに話す。」

「引つ張つても中々出て来れなくてですね」

「そうなんですか」

それを聞いて考える顔になるラミーロだつた。

そうして少し考えたうえで。こう二人に話すのだった。

「それじゃあですね」

「ええ。それじゃあ」

「どうするんですか？」

「二人が駄目なら三人ですよ」

二人に言つたのはこのことだつた。

「三人で。引つ張つてみましょう」

「ああ、そうだね」

「それがいいですね」

二人も彼の今の言葉に頷くのであつた。

「それじゃあ早速」

「三人で引つ張りますか」

「はい。じゃあ」

早速三人で時計の中のイニゴを掴む三人だった。そうして。

「いいですか」

「はい」

「何時でもです」

二人がラミー口に対して答える。

「いけますよ」

「どうか掛け声を」

「ええ。じゃあ」

ラミー口は二人と息を合わせる。そして。

第九章

「一、二の」

「三つ」

「よしっ」

三人力を合わせればすぐであつた。イニーゴはこれまでの二人の苦闘が嘘のようにあっさり時計から出ることができた。時計から出た彼はまずはほっとした顔になって三人に礼を述べるのであつた。

「いや、有り難う」

「いえいえ、御礼には及びませんよ」

「そうですね」

だが三人はにこやかに笑つて彼に述べるのだった。

「困つた時はお互い様です」

「その通りです」

「まあこれは御礼です」

だがイニーゴはこう言つて三人にそれぞれ懐から出した財布の中の金を手渡すのであつた。

「助けてももらつたのですから当然です」

「そうですね。それでは」

「有り難く」

「受け取らせて頂きます」

三人共金のことにはしつかりしていた。トルケマダは同時に時計の金まで受け取っていた。三人がその金を受け取ってからコンセプションは夫のところに来て言うのであつた。

「おかえりなさい」

「ああ、只今」

まずはにこやかに挨拶をする二人であつた。

「この時計が売れたよ」

「あら、そうなの」

看板にもなっているというその時計を指差して言う夫に対して応えた。

「売れたの」

「いい値段でね。けれどね」

だがここで寂しい顔になるトルケマダだった。

「折角時間を知らせてくれる時計だったのに。別の時計を出しておかないといけないね」

「その心配はないわ」

だがコンセプトオンはここで夫に告げるのだった。

「その心配はね」

「それはまたどうしてだい？」

「だって」

ここでまたにこやかに笑うのであった。

「これからはラミーロさんがね」

「ラミーロ君が？」

「ええ、そうよ」

ラミーロをにこりとした目で見ながらの言葉であった。

「毎朝私に時間を教えてくれるのよ」

「毎朝かい」

「そう、毎朝よ」

また言うのであった。

「だからお店の前に時計を出さなくても別にいいのよ」

「そうか。じゃあラミーロ君」

「はい」

ラミーロは関係を何とか顔に出さないように努力しながら彼に応えた。

「これからも頼むよ」

「わかりました」

「わかってるわよね」

ここでコンセプトオンがにこりと笑ってそっと彼に囁く。

「それでその時はね」
「ええ、わかってますよ」
「ラミー口もひそかに笑って彼女に応える。」
「それじゃあこれからは」
「宜しくね」
「さて、僕も」
「ゴンサルベもそつとコンセプションに近寄って囁くのであった。」
「宜しく御願いますね」
「まあいいわ。貴方もね」
「コンセプションは彼に対しても微笑んでみせたのだった。」
「これからはね」
「ええ。そういうことで」
「さて。何があつたのかは察しがつくが」
「トルケマダはそんな妻と若い男達を見ても呑気なものであつた。」
「それが何故かというと。」
「わしも市役所のあの娘と遊んだし夜になれば酒場の女の子もいる。」
「それに八百屋のあの娘もな」
「彼も彼で楽しくやっていたのだった。」
「お互い様だ。それで言うのは止めておくのが流儀だ」
「今回は失敗したが次がある」
「イーゴも彼は彼で言うのだった。」
「あの奥さんもまんざらではないしな」
「では皆さん」
最後にトルケマダがここにいる者全員に明るく声をかけた。
「夕食は皆で。如何ですか？」
「ええ。それじゃあ」
「コンセプションが明るく笑って夫の言葉に応える。」
「今から用意をするわ」
「皆で明るく楽しく」
トルケマダはまた言う。

「それがスペインの時の過ごし方ですから」
皆笑顔で彼の言葉に頷く。のどかで明るいスペインの昼下がりで
あった。

スペインの時 完

2009・8・15

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7286/>

スペインの時

2011年4月28日00時55分発行